

令和4年度 赤穂城跡二之丸門周辺 発掘調査の成果

赤穂市教育委員会では、二之丸門を含む二之丸北城壁整備のための基礎資料獲得を目的として、令和3年度から二之丸門周辺の発掘調査を実施しています。

昨年度に調査した1・2区に加え、今年度は3～7区を設定し、発掘調査を実施しました。



図1 播州赤穂加里屋城図（花岳寺蔵）
現在知られているなかで最も古い赤穂城の詳細図。門や櫓、石垣の規模も記されている。

1 絵図からみた二之丸門

図1「播州赤穂加里屋城図」は赤穂城全体を描いた絵図で、拡大図（図2）にあるように門の「高さ」「横」が記されているほか、門周辺の複雑な石垣の形態が具体的に描かれています。これによると、西を向いた二之丸門の南北に、土塀をもった石垣が接続しており、その前面に「L」字形をした石垣（二之丸櫓形城壁）を築くことによって、「櫓形」を作り出していることがわかります。また二之丸門とは別に「多門櫓」とあり、門の絵からもわかるように、二階建ての門であることがわかります。

図3 はかつての二之丸門の規模を記した図面で、石垣に挟まれるように築かれた門の柱配置や門扉の位置を推測することができます。二之丸門の横幅は図2では「三間二分（一間＝六尺五換算で約6.5m）」で、図3では「口幅三間一步（分）（約6.1m）」に該当し、これが門扉を示していると思われます。また図2の「多門櫓」の規模が、二之丸門の「桁行」「梁行」と一致しています。

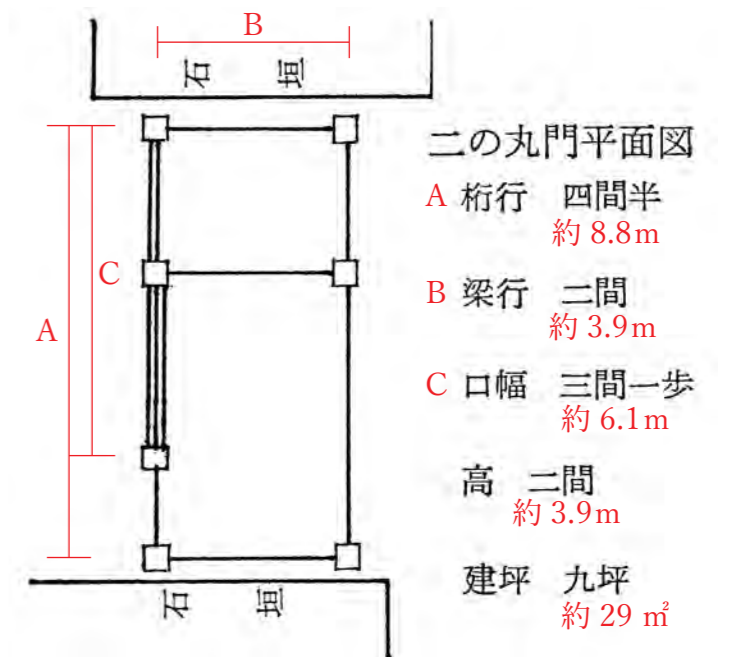
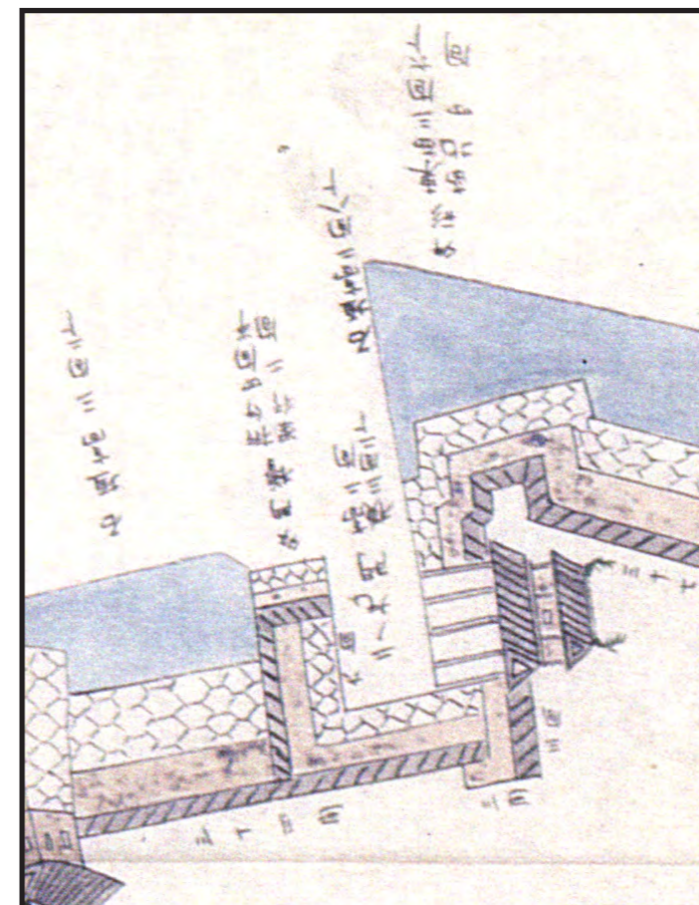
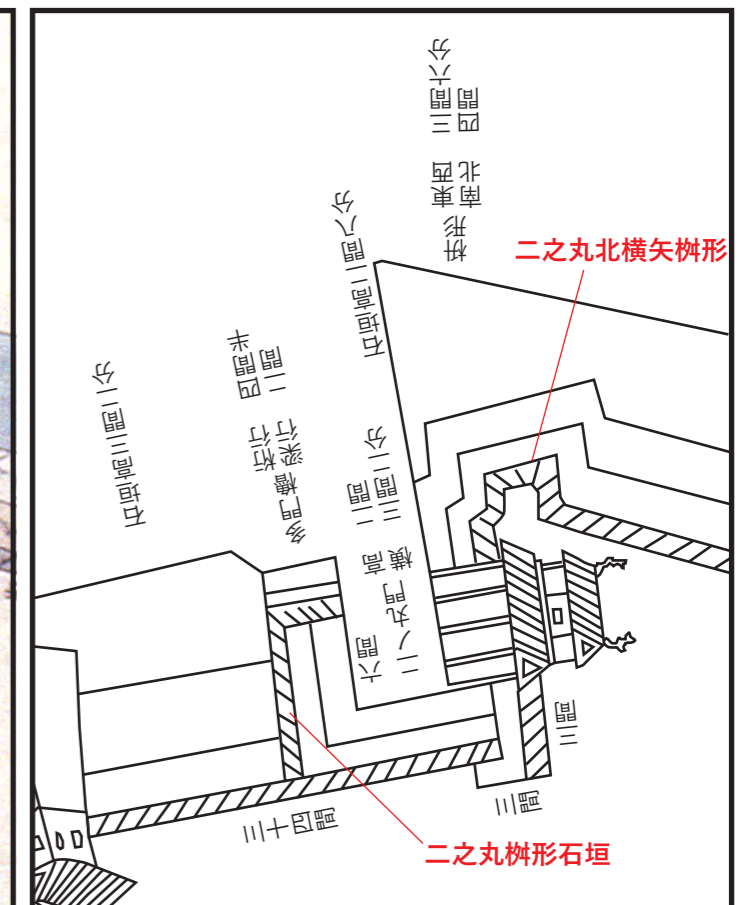


図3 記録に残された二之丸門平面図
廣山堯道 1982『播州赤穂の城と町』より。花岳寺所蔵資料。



拡大図



翻刻図

図2 播州赤穂加里屋城図（花岳寺蔵）の部分拡大と翻刻図

2 古写真からみた二之丸門

図4は、取り壊される直前の明治時代に撮影された二之丸門の古写真です。二之丸枡形城壁や二之丸北城壁の位置関係から、図5の左上方向から二之丸門方向を撮影した写真であることがわかります。

二之丸門の北側（図4の左方向）の石垣と、二之丸枡形城壁に挟まれた門への入口部分は非常に狭く、防備を厳しくしていることがわかります。またその手前には石落としがあり、攻めてくる敵を迎撃する構造が採られています。

ただし、二之丸門周辺の石垣は非常に複雑な形をしています。例えば「二之丸北横矢枡形」周辺や、「二之丸枡形城壁」背面の石垣形状は、古写真だけではその構造を判断することが難しく、また具体的な位置はつかめません。

そこで、1～7区の調査区を設定し、発掘調査を実施いたしました(図5)。このうち1～4区は、二之丸門の構造を明らかにすること、5～7区は二之丸北城壁の構造を明らかにすることを、それぞれ目的としています。

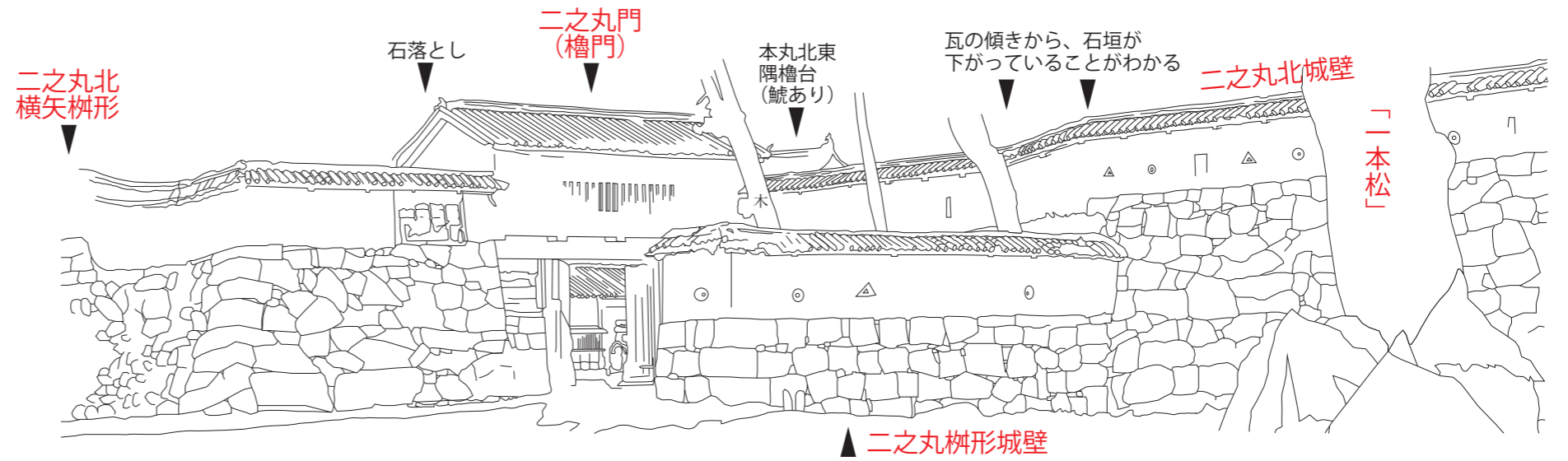


図4 古写真に残された二之丸門（明治10年代）花岳寺蔵

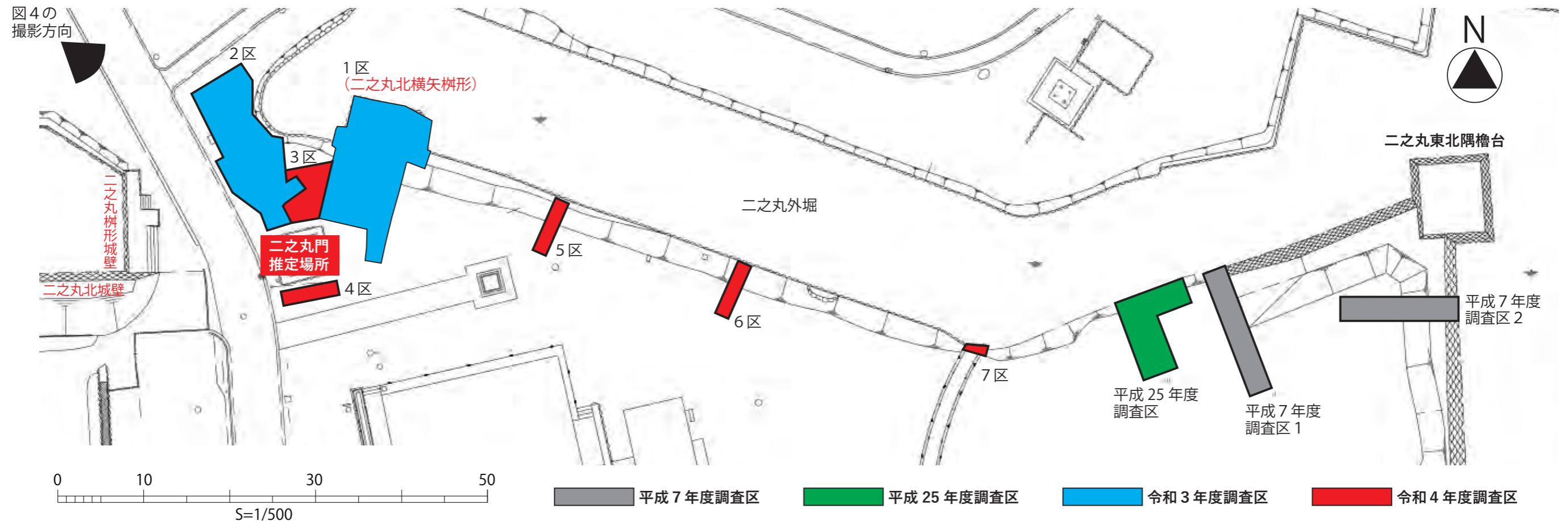


図5 調査区的位置

3 発掘調査成果

令和3年度には1・2区を発掘調査し、二之丸北城壁、二之丸北横矢柵形、二之丸外堀護岸、埋没石垣1、二之丸門北側石垣を確認することができましたが、二之丸門の位置確定には至りませんでした。そこで令和4年度には3区を設定して調査したところ、二之丸門北側石垣の角部分（出隅）を確認することができました。

また、2区で見つかった石列や栗石列が、3区では途絶えていることも判明しました。この部分は石垣上に登るための階段（雁木）を推定することができます。

2区で見つかった石列は、上からみるとカマボコの断面状を呈しており、ちょうど二之丸北横矢柵形の背後にあることから、隣接する

栗石列とともにこの横矢柵形の構築時に関わる地業（造成時の地盤固め）であると推定しています。

また4区では、石垣そのものは見つからなかったものの、裏込め石とその据付け穴が確認されました。

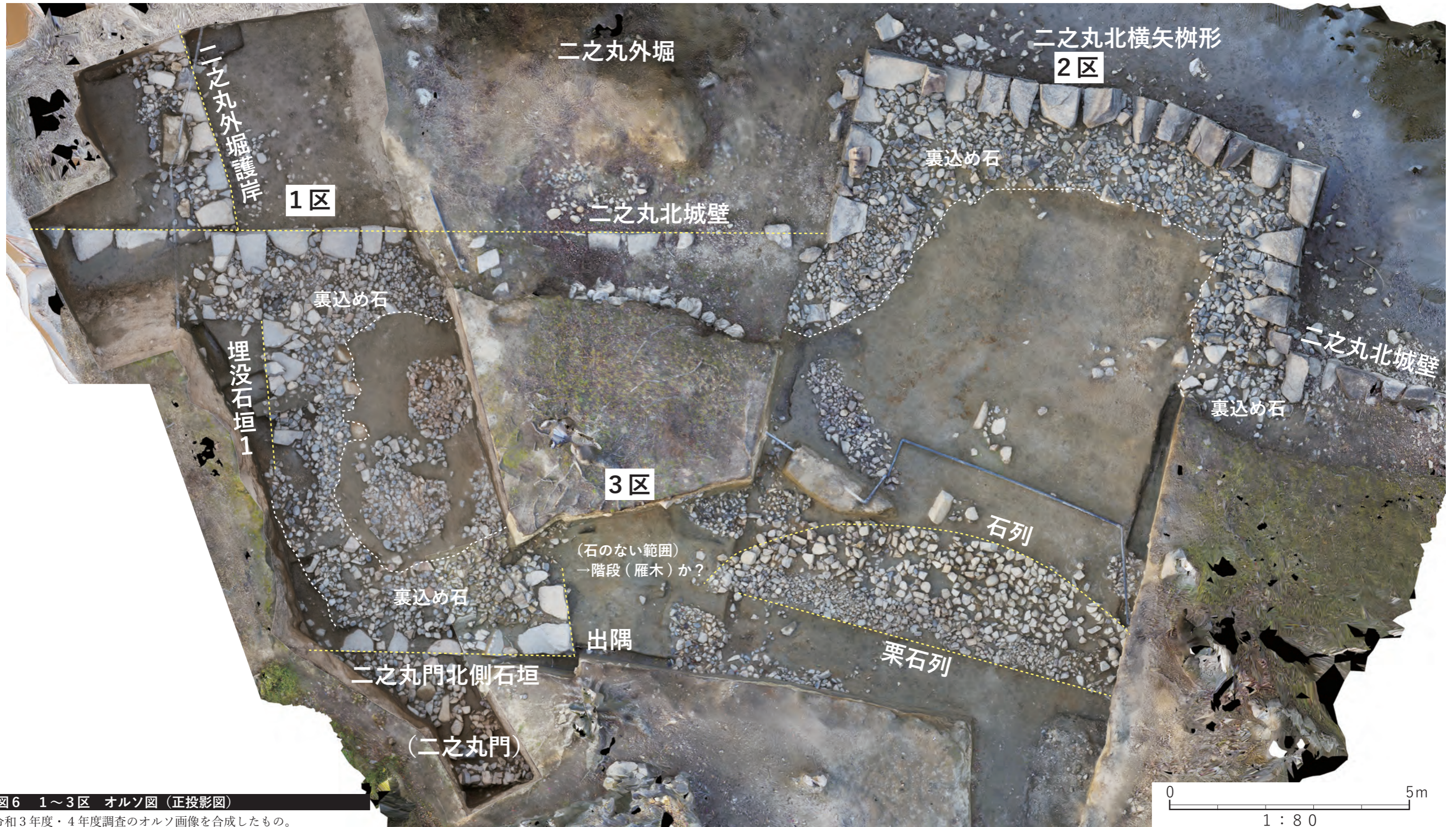


図6 1～3区 オルソ図（正投影図）
令和3年度・4年度調査のオルソ画像を合成したものを。

4 埋没石垣の評価

二之丸門周辺は、平成 14 年度にも発掘調査を行っており、それを合成して位置を合わせたのが図 7 です。まずは 2 つの「埋没石垣」に着目してみましょう。両者とも、埋没石垣が築かれたのちに「拡張石垣部 1・2」（赤色線部分の石垣）が築かれており、改修が行われたことがわかります。これにまつわる興味深い事実があります。

承応 2（1653）年 10 月 15 日
 太守二郭の虎口を縄張す。僕を招きて談ず。太守自ら其の地に臨み、群臣列び共す。僕間縄を取り改め直す。此の日曇り甚寒膚に徹す。

廣瀬豊編 1941『山鹿素行全集思想編』岩波書店

二之丸門は、軍学者であった山鹿素行が縄張を改めたことで有名です。今回の調査によって、二之丸門への侵入口を狭めるため、山鹿素行が拡張石垣部 1・2 を築かせた可能性が高いと言えるでしょう。

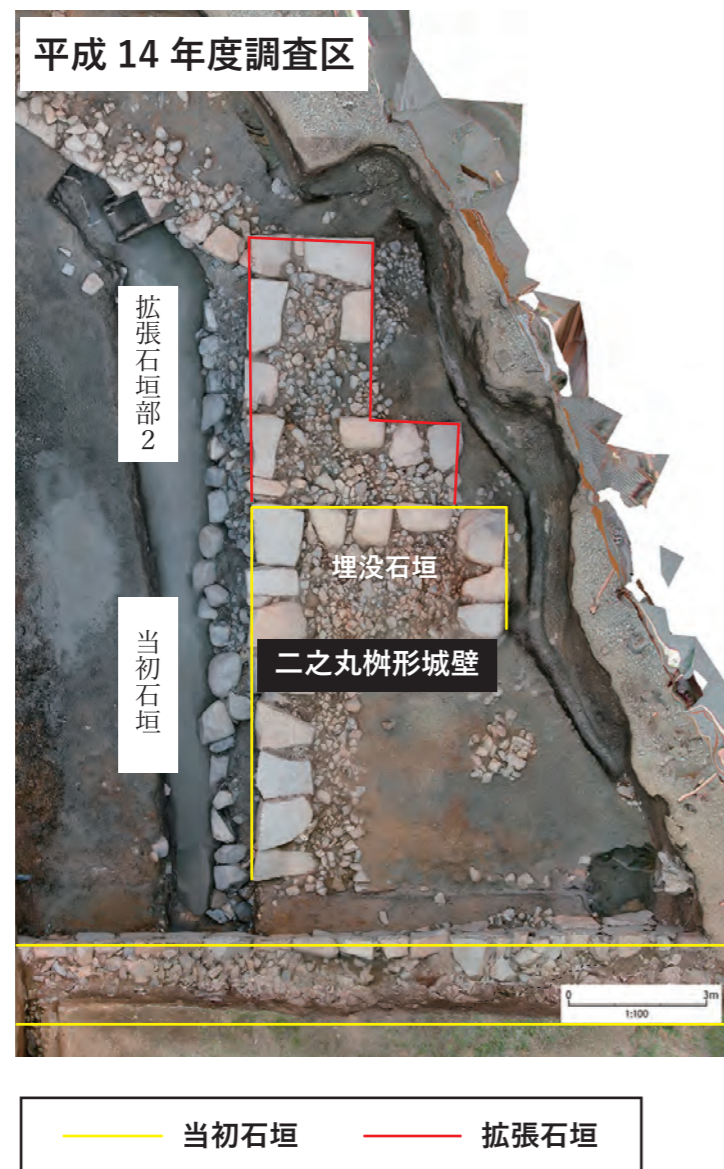


図 7 二之丸門周辺の復元案

平成 14 年度・令和 3 年度・4 年度調査のオルソ画像について、位置関係をあわせて合成。二之丸北横矢柵形の規模は、絵図記載から東西・南北を入れ替えた。

5 二之丸門周辺の推定復元

絵図、古写真、図面、発掘調査の成果を用いて、二之丸門周辺の復元を行ったのが図 7 です。まず発掘調査から石垣のラインを推定し、そこに門の規模をあてはめています。

発掘調査で見つかった石垣は、かなり深いところから見つかり、当時の推定地盤高（標高 1.5m）から 1m 以上も下で見つかり

ていることから、石垣の勾配を考慮すると復元図では石垣と門が重なって見えるところがあります。

多くの推定を含んだものですが、二之丸門の位置と構造が、今回の発掘調査によってかなり明らかになったと言えます。



図 8 城壁断面の模式図

この図を上から見ると、根石と天端では大きくずれることが理解できる。

